

安政見聞誌
下

ヲ 1
3754
3





藤原若くは若人と
 さる小足由物に遠く
 みて見奉ると咄せる人の
 そのまじらふと挿寫して後
 世の咄一の種小物と

金瓶梅

石段下

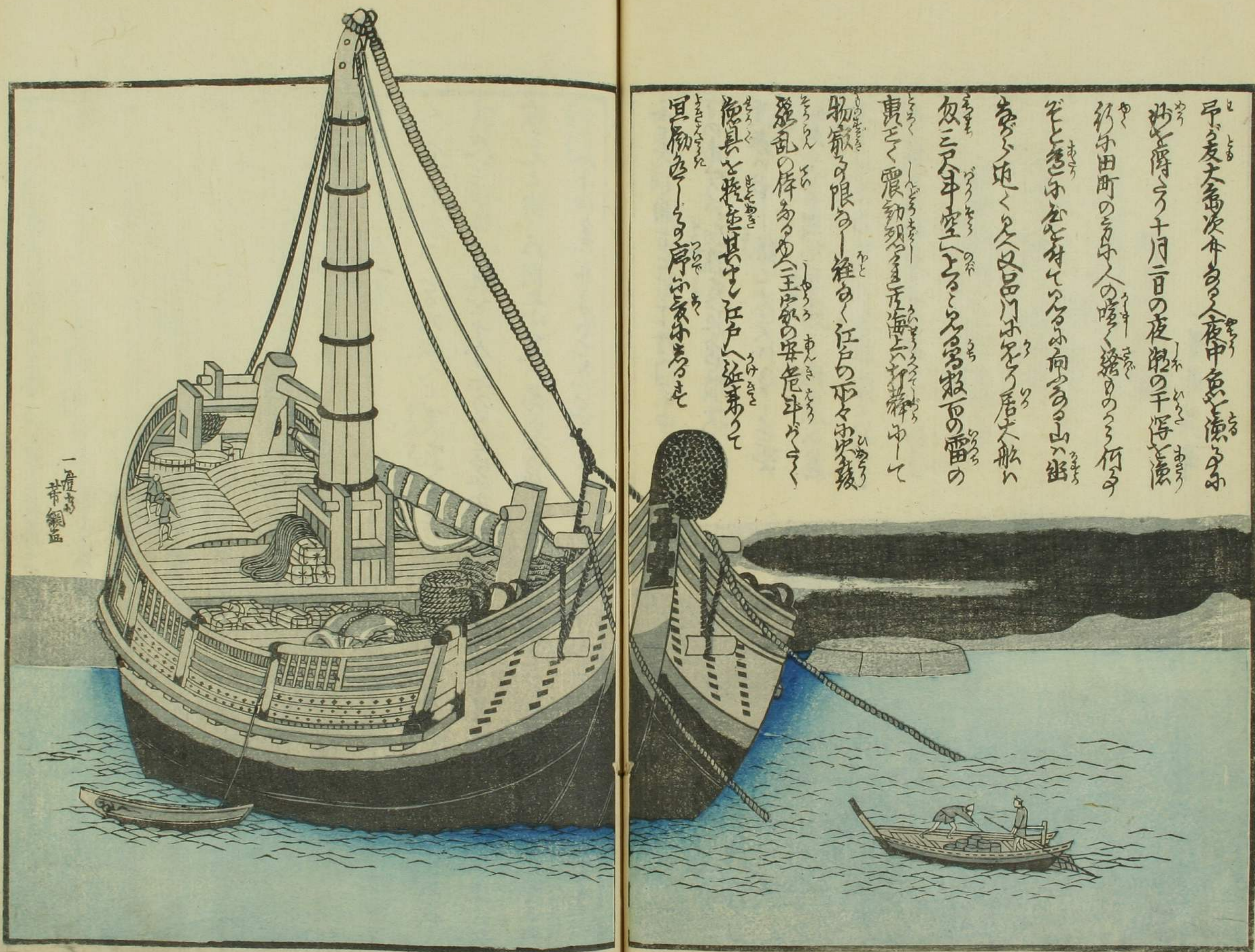


石段下
 藤原若くは若人と
 さる小足由物に遠く
 みて見奉ると咄せる人の
 そのまじらふと挿寫して後
 世の咄一の種小物と

金瓶梅

橋之破換為雨多△鹿田村日赤方日為坂口家丁砂利場色武家与流民家
 有破換雨多△倭見橋色武家町家大破換△高田馬場宛八幡本社堂
 日樓丁黒田丁改代丁古川丁小日向色と大破換為雨多中里丁矢来下色
 赤城門外丁寺丁大破換白銀丁半田門外と破換為雨多
 △半田門外分野子坂と表側破換為雨多日赤方為雨多南方は雲著
 丁山御丁杉並土形と丁日赤組中と大破換為雨多△赤雲坂田丁左内飯より
 西方は御戸丁加賀中と家吉丁破換為雨多△市若門外尾別換為方
 川田ヶ窪大久保色は橋為く破換少一月桂も南方為雨多△日若門外
 花丁万年極換為雨多△本村丁山入丁寺丁大破換為雨多
 浄雲も換丁為雨多△傳子丁破換為雨多△塩丁大破換為雨多△大平
 南方為雨多内為形高と内為後河原下中と大破換日赤方は切目組
 屋敷南方大破換△冷邊外懸ヶ橋も丁色大破換日赤方大書丁
 破

△赤坂門外紀別換泰平日赤組ヶ橋仲丁小丁伝信包丁大破
 以橋頭為南方大破換為雨多△六角辻作橋少少日赤破換為雨多
 △吉山武家町家為雨多△赤雲門外△赤雲門外△赤雲門外△赤雲門外
 以色大破換為雨多△橋の内妙法寺本堂と寺門外少破換△赤坂田丁南方
 鳴坂黒漆色は色為雨多△赤坂丸は色破換為雨多
 △麻布日ヶ窪は色為雨多△今井長破換為雨多△六本木為雨多△新去
 武家町家為雨多△弁橋は色破換為雨多△湯島為雨多△湯島分樓
 坂上大破換△市若門外丁色大破換△長坂色破換為雨多△大破換焼籠御
 堀色為雨多△以人坂為雨多△目黒石動本堂と寺門外破換為雨多△白根
 丁大破換△瑞雲も色門外丁破換小中と為雨多
 △虎口外泰坂是為雨多坂市若門外丁南方大破換為雨多△西の久保大破換
 家多△おせんが長大破換武家町家為雨多△飯倉平丁大破換八幡又為雨多



一層
井網
五

早更夫大高次舟なる人夜中魚を漁るゆ
 妙を得る十月二日の夜船の干得と漁
 新井田町の舟人の噂は終りのころ何ぞ
 ぞと悉く舟を舟に引合ふる山に出
 るる地へ久し久し引合ふる唐大船の
 忽ち半空に上るる雷の
 東に震動烈きまに海上に打落ゆて
 物敷み限る一柱あり江戸の町を火焚
 騒乱の作あるゆ三王の安危半がさ
 徳具と我を其の江戸に送あつて
 且初より序の事あるま

下

△戸が女小泉氏と縁の方要るまで系居る右大池養小て江戸表大火の時を
 きて利子を捨て函道とて帰途に八幡と東比の十月四日夜丑刻に小村外小
 て年の瀬廿日女二才半の児と相籠る小泉合一してとんとて是を
 又んとする小泉合一してとんとて是を其子の妻の正くまは合一してと
 又丁半の女小泉合一してとんとて是を其子の妻の正くまは合一してと
 連行する夫とをその女と問ふに其の女の正くまは合一してとんとて是を
 叶へるまでとて返るとしてとんとて是を其子の妻の正くまは合一してと
 妻由女といふ老地居の好澤中を旅する二才の小児と合一してとんとて是を
 人なくと殺小まる不候人と其乳を共小任せど父の痛小治を合一夜
 其児と取物一乳と十分小のませ家内他列と定まらざるは居居て是を合一して
 成るとして捨るぬ因之小泉の系居るの傳りける結成せむの母の亡魂にて我子の
 養小小い息小方小て乳と其乳を合一してとんとて是を其子の妻の正くまは合一してと

龜戸天神社内西口葦表圖

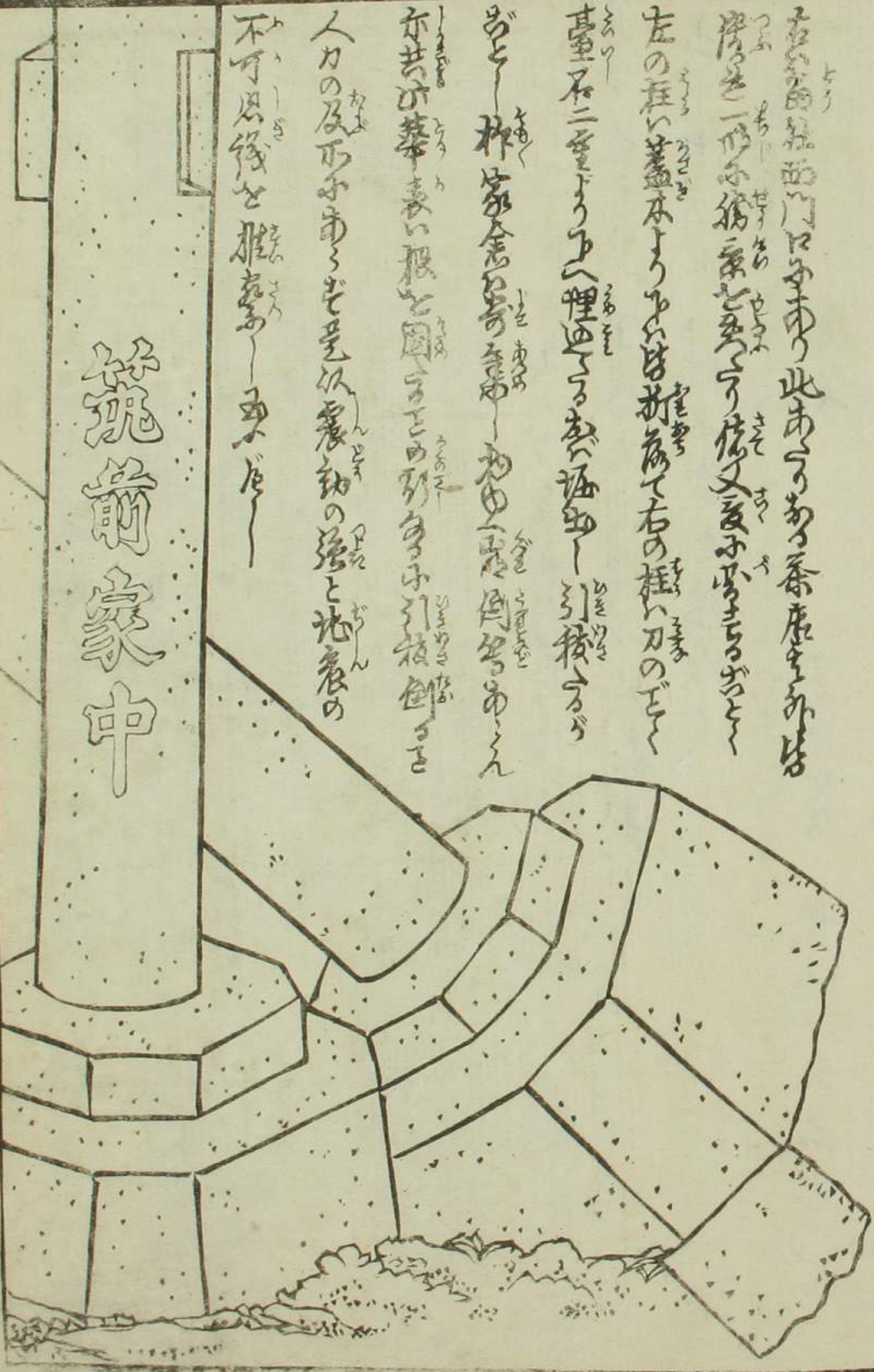
二重の菅石より下方四尺八寸半あり
 左の立柱のあたりに半の埋まあり

右の西門はあり此ありある系居るを合一して
 深き一尺の箱とあり又又小泉の合一してと

左の柱の蓋本より小泉の合一してと
 臺石二重より八厘とあり合一してと

右の柱の蓋本より小泉の合一してと
 亦共の葦表の根とあり合一してと

人力の及ぶあり是れは葦表の強と地居の
 不可思儀と推してと



葦表家中

下

△電氣社下敷小池色徳彦上中下登安破損意紀

△其煙寺徳院大破損△万年山寺松島因ト△電氣社大破

損有り△三縁山端寺徳彦大破損意紀△切寺大

武家屋敷大破畧△因不令地院大破

△新橋外南方徳彦大破畧△本代地所大破損意紀

因南方兼房所寺丁中焼方先と疑△中り小港是家多

方中平寺徳彦寺より之家徳彦多△因不伏見丁中丁久保丁

寺丁長右衛門丁等大破損ト為家多

△山下河門外山敷小登之徳彦人

一 尚百歳辛斐文

一 小珍 二十斐文

一 長裁 長裁

一 歳 二百文

新橋丁四丁目

寺三所地信

尾陣 六右衛門

本橋丁五丁目と納地

家持 徳三所

依本道左所橋代安示

下徳小池寺歌布依村

百姓 七所長宗

一 菜漬 一 橋

一 生姜漬 一 橋

△三田寺系新橋向小有馬房小長屋水天宮系指門の際

より東の方へ百石有餘揺屋より△薩大振表お見破損

△寺町屋不多

△樹木長大破損意紀△いさらと大破損△二本枝意紀

△池上本門寺大伽藍悉く△長門系石垣破損意

△令於橋南方本芝寺り破損意紀△本町寺梅小町南所

小水川伊和屋と云旅籠屋一軒壊意紀△外大破損

△芝下新橋意紀大破損意紀△意紀不多

南小田系丁南本以下大木為日小方由八丁端割河為本多換塔是
 層表側被換并伊掃的換中中丸跡列換中中丸木之被換松平並換上
 中丸中川換上層表被換松岡換上中丸大被換小笠原備後換中中丸榊原
 被中換美平換中層表大被換高木あり△合引橋南方古抄換中中丸万平
 橋被回渡路換永井並換中層表細川換中中丸松尾内橋換上中丸大被
 換△本換丁三丁目より東方武家町並と由大木為漢中並あり

一 丁之被換 丁之被換 丁之被換 丁之被換 丁之被換
 一 丁之被換 丁之被換 丁之被換 丁之被換 丁之被換

△割河為南本松村丁伊在換塔田換中中丸板倉岡換中中丸為尾換
 下中丸木為日小方由あり△東方三の橋並換中中丸被換中換下層一丸橋並
 長の換中層表端山換中中丸榊原換上中丸加細換上中丸美平大換換上
 層一丸木大被換高木あり△惣領尾流丁八丁

丁之被換△山下の月端為加換大被換
 丁之被換△山下の月端為加換大被換

△東橋山の内松平村之跡換塔東橋山換後の方事燒之
 止る月小方由の足邊換有る後換中中丸跡列換塔東中丸事燒之止る
 跡の橋下換丹羽善被換打末全の換小笠原備後換中東お掃換大被換(四段)

△四 月比若山内松平紀事換燒る長列換後の方大被換之史記あり一日可
 以月層表大被換高木あり△外橋田并伊掃的換上中丸外橋長層被換
 △虎ヶ岡園田換表割橋足並長層為る日西妻意換被換△虎ヶ岡内備後
 とも被換高木あり善き紀一(一)△之の被換大木由大村換被換層

日西小方小中丸為あり△山王社并美濃内被換の并高木あり丹羽換上外
 被換高木あり△赤坂山内東方西橋の西被換ゆへ善く化(一)△
 △達門色大被換高木あり日小東方町家大被換△平川夫林社被換塔内

万石下
 万石下

西少一△同右方以海濱爲橋爲塔濱丁若谷川丁日少
 一入於丁塔丁
 青屋丁林本丁而破換爲西多一△小綱丁塔江丁小舟丁辺若年燒失
 傷由新家内爲西少一△小田系丁津夫池丁江若橋色破換爲西少一
 △日本橋小方室丁十水系今川橋之文破換爲西多一△支整丁橋河丁
 教考屋丁不編倉河岸之の内而破換爲西多一△日西方考盤橋内新お換
 文破換爲井江の橋小室系橋上中江破換夏目江を換破換△新口高南
 傳奏屋爲細川橋長橋橋内秋元換松平傳豆換文破換爲西多一△小江高南長
 屋渡を外破換△日南方松平丹波橋水世園防換鐵後換古抄換河抄換工
 屋爲何是も破換爲西多一

四 大名小治而破換爲西多一△教考屋橋内永井堂江橋本多中橋換中け
 松平右系換古井文破換文破換之文是也

五 八代洲河岸定大浦中江林之屋換堂屋組を換之焼日而園別換中台焼

一と道あり止る竜口南河船伊勢橋換東浦方越馬

四 寺場ありの内本多中換江高本多安慶橋換神橋お換河井右系換
 文破換爲西多一△松平中橋換内爲代橋換中け

五 和田倉江の内松平紀後換日向守江日而江の之保青西中けの松平傳換
 換上屋爲文破換

四 大倉あり橋井之雅樂換日向金屋若川出羽換焼△一ッ橋江の内竹橋
 江の橋ありの内田安江の内本破換あり古爲西少一

△日南浦方代友丁文破換爲西多一
 △津飛江の内文破換

右之介江府内町之武家寺院官社所家寺方之而相代漏る台の後
 爲小形寺也

明曆三兩年

正月十九日江戸火

火焼七十万人を依る本所小

法宗山無縁寺回向院を建在て

右追福を修せしめ其を其大少思ひしる

今彼の強札の右の高よりよりこりてあり

何やして其報を報せしめしる小少商地の中

諸宗の寺院幾千あり其塔中を加て

一寺の五人宛葬せしめ廿万余と云ふ

是宜ある是も人書深く考ふべき

實日明磨より遙小を云と悟

初て悲しあり大哀火焼てより其体と

幾共なくせしむ又四斗持小入車小の其

香花院小送る容るんを實小欲て百余の

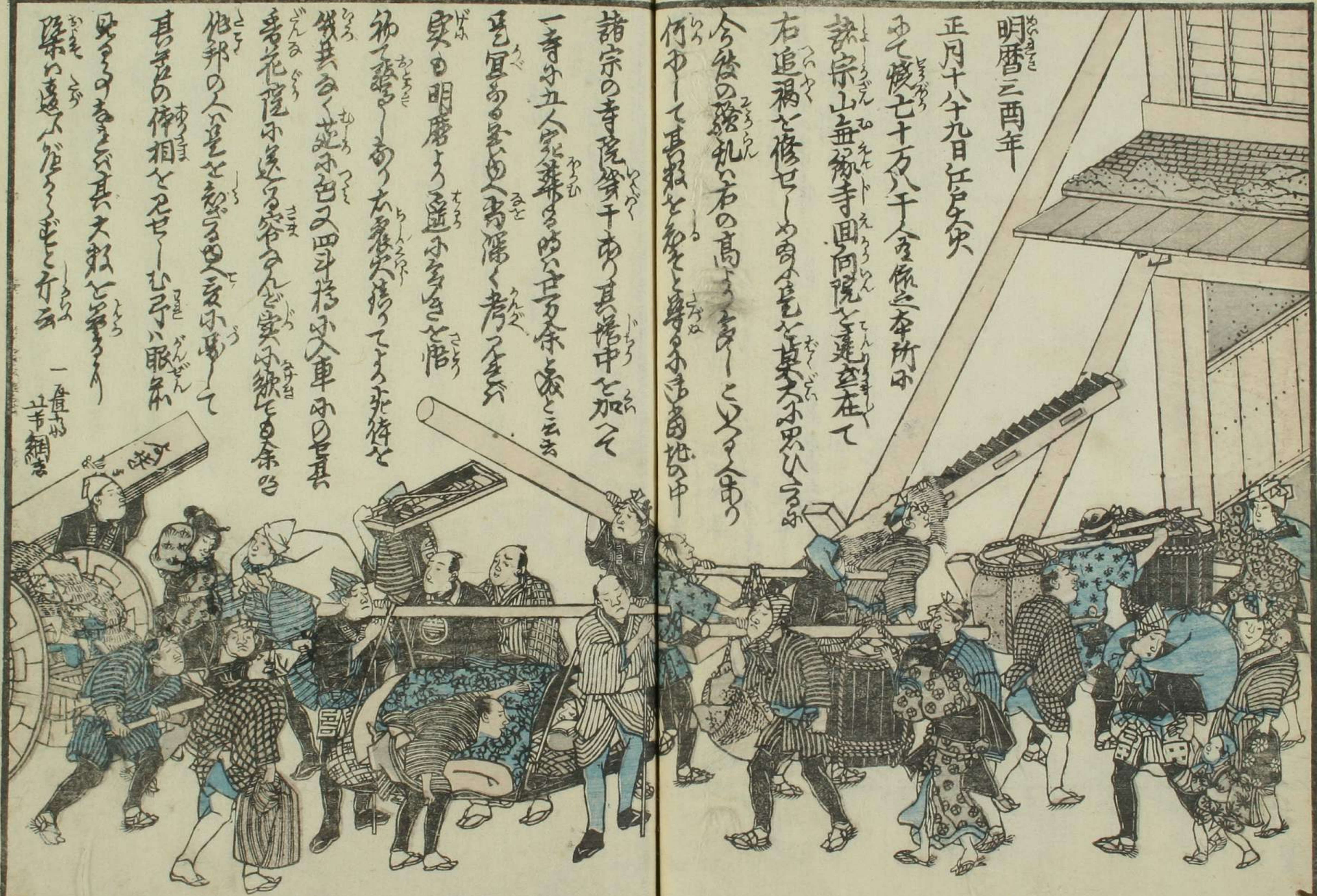
他邦の人は是を知らるる也小ありて

其まの俸相とせしむ予ハ眼を

見るとのまを其大報とせしむ

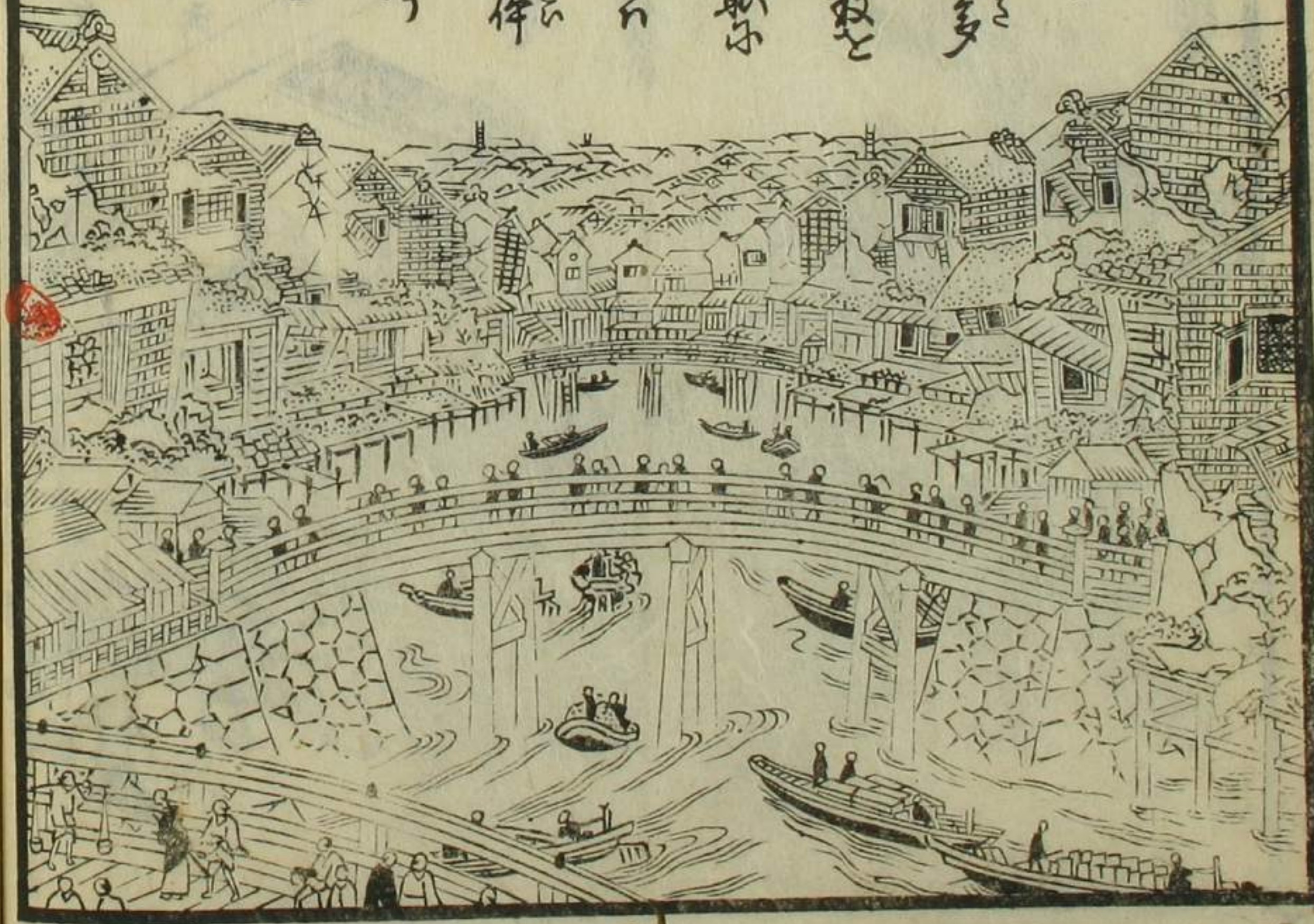
際れ遠くはなれしと云

一叠物
上巻



武府内火災と脱きん若小位居等まで
 海軍家又の遠とあるまじい金の多き事
 比北不張り北金ふるまふ事一物中金の數多
 あり流布格より四方とる事小は而より金の數と
 なる所い文化所ふなり物小建家の破技ハ眼小
 止る事共震出格あり一の散れせし侍の
 實小秋息小命是より勿論若小下目安侍
 ありたりといふ事世侍ハ又物一まきい今
 若小ありて一物境を風の人多き事一む
 初小小長夜をいひせせん火災なる事一む
 又侍格といふ事一む

一書
甘鯛



△折を死首のみの徳書小物といふも當代の老人於てさふ知るものな
 まづ二年奉來のみの眼筋ふるる所あれば他人疑ふも有べし人衆
 いまもさうさうの義の批とさふ紀也○文政十二寅年五月其報を司始り
 ○天保之辰年二月武幕令を司始り同六年七月百文錢を司始り
 ○同七年法皇不伴三月以百文身米武令八夕飢死りの花多し是より
 幕七十六年以幕天明之年小の百文身三令又同七年八月百文身以令又
 其時序小の法不米登と抄毀撥乱多し由り然る小衣天保末年ハ
 稲妻阿武松ふて角力ハ大入大禁昌又芝居ハ中村歌右衛門の衣鉢松吉
 あり大當り更小風塵の体小あり是是令く 公より小救の厚るる小
 幕亦ありて一○天保八年幕め五判を分報を利始り○月九年法
 幕小作百文身米武令八夕以救ある○十二年十月十日より天保改年
 芝居ハ濱多し人智地所と花女登を挿仲万組令統運上小免とあり信發

対海とある。○同七年八月日光社系あり。弘化三年七月下総に近
 在大名東京日本境へ水溢より小塚系大地系首首まをあり一系海の如く
 五系水代性来より又を五村の家流と云亡人五系不依て江戸系村へ改系と
 十村らと改系出る冷所然が所安へ連系あり。嘉永二年二月小倉に麻粘を
 ○同七年八月一日大雷一撃の如く以府内中百六系系あり。○同六年三月イキリス船
 長係へアメリカ船お欠浦登る本係依て改系へ命下海系に因る又不門の港中へ
 砲臺場出する。○同七年八月ヨロヨリ大坂へ来る。○安政元年振表地に開発あり
 ○同二年十月二日日夜の大地震あり凡系年の世小生息と来て月不輝くことと
 ぬむ中ふも系玉の人より九系洋の珠砲或は蒸気船を作り又の具是にて改系を
 大筒と尊めて町とて築きんが故人ものまこと知る様ありと今眼系小つること
 是まこと一ツ世の中の業とこと必ひぬるむが前代の人よりも務まるとる事いと
 飲系銀粒のありと後の人不知とせんを系紙と流しに流さふことと

上野野丁 徳野 牛王助改新 是泉院名社 加祿

在る去十月二日夜地震あり其住居損壞甚なり由能家の中ふ改新一系小十
 余ヶ所の症と改新たり小音権たりとくいとより人の安否を許す胆力あり
 廿業ながら板柱をせとく一程又とる病と改新く改新の事と改新
 以居隣家より火災ありと改新大ふ改新たり人を救出さんと本危と
 五系居は雨小月雨あり丁名と助改新の改新ありは存大改新と改新あり
 加留改新の事と改新あり中と付大助改新の改新ありは改新ありは改新あり
 二系改新の改新あり人助改新あり一前改新と改新ありは改新ありは改新あり
 陽面改新と改新あり丁改新と改新ありは改新ありは改新ありは改新あり
 改新の改新あり改新あり改新あり改新あり改新あり改新あり改新あり改新あり
 三人と改新ありは改新ありは改新ありは改新ありは改新ありは改新ありは改新あり
 示傳の改新あり改新あり改新あり改新あり改新あり改新あり改新あり改新あり

体らるるもむらて左なる小夜虎の身中一むと灯籠のよきおぼしむ目と
 さすけるふハトも一灯の影ゆりの様さうろん一人の若さ女いふふ十女さかの胆
 と消滅けつめつんとまゐるふきふらむいむ唯身ぶらひを思ふのこけと死女さうろくさめと悲し
 ものふととむ妻の柳あふる蜂頂はちまき笑小妻夫が女むすめと足下の主人大作をふい由所ゆりの
 ものふ一色と大作をいふ一匣ひら斗たひと飲のまゝと赤足下小進せんととふ
 かんた物とあうらうらふふと女むすめの扱あつかを一人の影さゆさく子小一色と持居もる
 かるふのち居いとまゝといふ死し我家へ強たうらうらふ其由ゆと告其場ばの容ようさう
 談だんける小大作の深ふかく夜よに且かつ其色と用もちるふ数多かずの金かねふ一言と海うみの其その子
 左ひだりなるを△相あひま一右小妻の去い寅年五月旭あす初はつ日浦うら笑わらひあり留とどまらん家内うちの
 右みぎ女むすめみち子こ小侍せうじ下男げなんと人ありら物もの居い中ちゆう其家その居い下した下男げなん共とも昇あ死し
 けみち子の足あしと形かたちをみみち小こ庭ていをみみちの命いのちも危あやしむ一念いっせんかふ

閑まどろ家と挽ひ出だすのどく若わか痛いたとまのこ一色と一書とまゝあ誰たれ出でるのれん
 ありふたわ臨りん終しゆうのそら到いたらん人ひと居いらんあり次の茶ちやとまゝ解とける
 一十月二日夜地いちじふにちやちらんてははるおとち一色とまゝあ一くおとていまは
 以もちてをいふ一人の家内うちのあふらんいふらんあま
 りあ〜たおれら〜いふらんあま〜いふらんあま〜
 成なる〜唯ただ一色とまゝあ一色とまゝあ一色とまゝあ
 ちゆらま〜いふらんあま〜いふらんあま〜
 右みぎ書かきの中ちゆう村むら入い作しやく下した男なんとまゝ一信しん友とも小出こです△まゝとる小支し度ど一いち十じゆ分ぶんとた
 浦うら笑わらひ初はつ日にち小こ夫おとこ小こあひ香か油あぶらとものごう一色とまゝあ一色とまゝあ一色とまゝあ
 狭せまき〜い〜且かつひとと扇あふを中ちゆう村むらと共とも小こ船ふね中ちゆうて江え戸こ小こうら岸き家けと取と除ぞるふ小こ良ら
 べ〜二にふ女むすめの五ご件けん碎くずて中ちゆうや下した書かきと恐おそへら容ようあり一唯ただ父ちちとまゝの二念にん深ふか現げんたの如ごとく
 五ご斗たうひ縁ゆかり主人しゆうじんと待まちらるる人ひと実まこと小こ若わか公こうの至いたと同おな小こ茶ちやと席せきと記しとる

△溪川寺町を流るる家も多し一俵坊を果の余三々所掃居一土尾山の寺一
 と名取行せんあまも今度の騒亂前代末皮あまの人と申さく五日の夕夜に
 けきど性来の成さたゆやく人と申すいふ尾と取除させる小一人の男と堀
 物一々各大小あざりた是と引中一ける小坊有ては男目とひくた色と見え
 之の何れなるぞと云ふはけり所あさままうと申すも一俵と尋ふ小坊のちの
 居て押ゆらき一すゝあおあうと云はるのちと云うと云うと云うと云うと云う
 同谷の正ありて是日急病一凡は夜の天変小舟艘亡等の水業幾万人と
 ゆる員と云ふと云ふは世ころの報報やと脱がたりのく小坊の志と
 土中小埋て日敷と云ふ共安伴ありの是是又善果の因縁やと云うある死地
 小入とも生命と云ふと云ふ一今眼元の途あり八ヶ岳北島丁貨物果引被一軒
 家余微甚と云ふ捨我人あり其支障い安全ありて是一報居る事あり一是の因
 縁とて是別死地居るを大支障い皆何の人ありの事と云うと云うと云うと云う

△今度地震より火災の中より一と云う
 江戸下某と云う七八の人の死に
 俵坊と大難と云う流るる中
 十人の子女と云う其の母と云う
 こそ安全の俵坊と云う
 あまも明中と云う小何と云う
 死居る各忙然と云う一と云う
 けきと云うと云うと云うと云う
 夫魚の水中小居て水と云うと云う
 何と云うと云うと云うと云う
 多く吞て腹中らあはれと云う
 此の建よりたはれた大穴居る小舎等の話



